

対馬市の現状と取組みについて

対馬市長



比田勝尚喜

報告要旨

国境に位置する長崎県対馬市^{*}は、大陸文化の玄関口としての歴史的背景や、海・山ともに豊かな自然環境といった地域資源を有するユニークな島であるが、過疎化による人口減少、それにともなう生活インフラの脆弱化や生態系破壊が深刻な課題となっている。

対馬市では持続可能な社会「自立と循環の宝の島」を目指し、「ひとづくり」、「なりわいづくり」、「つながりづくり」、「ふながりづくり」に取り組んでいる。本セミナーでは「ひとづくり」の例として「島おこし協働隊」「域学連携」の取組みを、「つながりづくり」の例として「地域包括ケアシステム」の構築について紹介する。対馬市の取組みが、将来日本の課題解決のモデルとなるよう、対馬は対馬なりに頑張っていきたい。

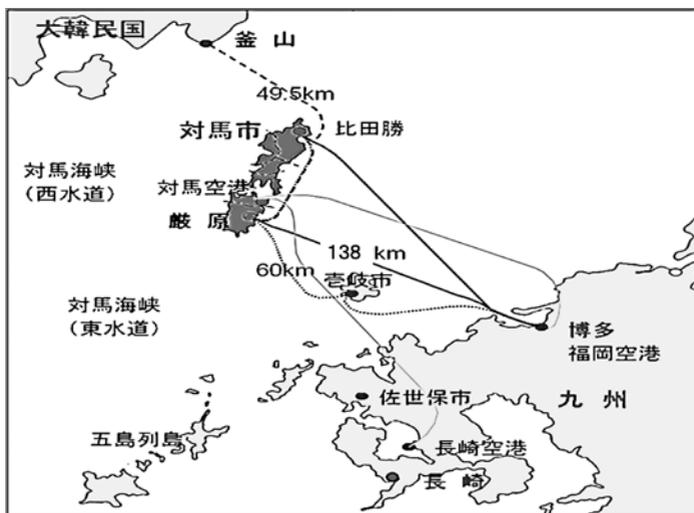
(*)平成16年3月1日に厳原町、美津島町、豊玉町、峰町、上県町、上対馬町の6町が合併し、対馬市となった。

1. 国境の島、対馬

まず、対馬を訪れたことのある方は、ここにどれだけいらっしゃいますでしょうか。首都圏ではまだ知名度は低く、どこにあるのかよく分からないという方も多いと思います。九州本土と大陸の間に浮かぶ島がこの対馬です。九州本土までは約138km、かたや韓国の釜山までは49・5kmです。最北端からは、天気の良い日は肉眼でも大陸を望むことができる、国境の島でございます(図1)。

島といっても大変大きな島でして、日本の離島の中では、佐渡、奄美大島に次いで3番目の大きさです。面積は約708km²、人口が約3万1000人です。島の中には125の集落があり、多くが200人未満の小さな集落で、いわゆる高齢化による限界集落も複数あり、過疎化の様相を呈しております。

(図1) 国境の島 対馬



(図2) 交流・交易の架け橋「対馬」



日本海と東シナ海の間には、対馬暖流がぶつかる。対馬は、アナゴやブリ、イカ、アマダイ、アカムツなどの一大漁場で、漁業が主な産業です。中でもアナゴは漁獲量が全国一ということですが、刺身で食べられるアナゴはここ対馬だけではないかと自負しております。ぜひ、対馬においてになって、アナゴを食べていただきたいと思えます。昨年は韓国からの観光客が約36万人となり、観光業も主要な産業になりつつあります。

対馬は日本と大陸を結ぶ交流・交易の架け橋的な存在です。大陸文化の玄関口として、コメ、ソバなどの穀物、そして仏教、馬、漢字などさまざまなものが、対馬を経由して日本にもたらされました。

江戸時代の貿易は長崎の出島だけだったと思っている方も多いかもありません。対馬藩は朝鮮半島との交易を許され、現在の釜山タワー

付近には倭館わかんという交易拠点があり、民間人や対馬藩士を含め約500人が居住していました。朝鮮半島からは生糸や絹織物、朝鮮人参等を日本にもたらし、日本からはコシヨウや銀貨幣、出島(長崎)を経由して輸入した東南アジアの物産等を輸出していました。今年の1月10日、宮内庁の講書始の儀におきましても、慶應義塾大学・田代和生わさひ名誉教授よりご進講がなされました。^(*)

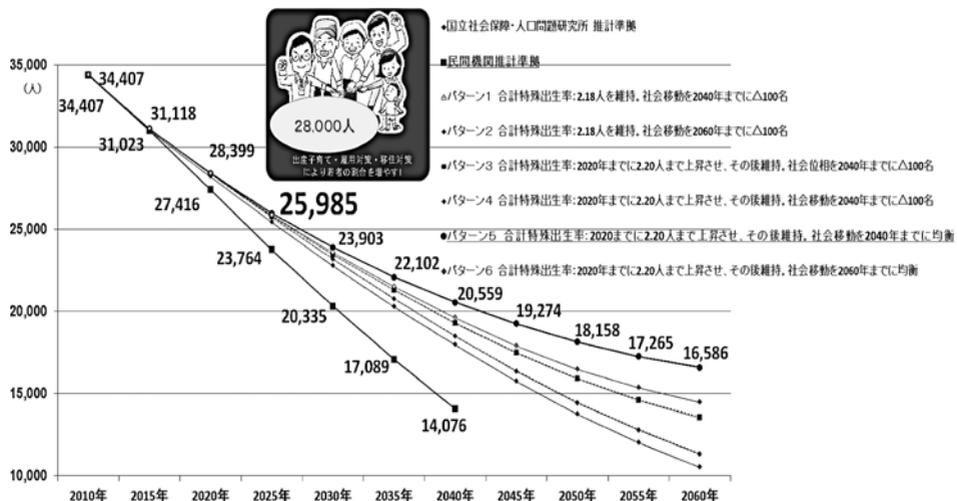
また、対馬では初めて銀が産出され、本土に送られ鑄造もされていたという史料があります。^(*)絶滅危惧種である特別天然記念物のツシマヤマネコをはじめとする大陸系の動植物や、日本系、日本・大陸共通、対馬固有の種が混在するユニークな島でもあります(図2)。また、国内で38年ぶりに野生のカワウソが発見されました^(*)のも、対馬です。

2. どうなる? 対馬の未来

対馬はこのように資源豊かな特徴のある島ですが、厳しい現状にもさらされています。これは、対馬の2060年までの人口予測です(25頁図3)。対馬の人口減少はさらに進み、厳しさを増す見通しとなっております。市としては2025年には2万8000人の人口を維持することを目標とし、人口減少対策を最優先課題として取り組んでいるところです。近年若干明るい兆しが出てきて、これまでより少し人

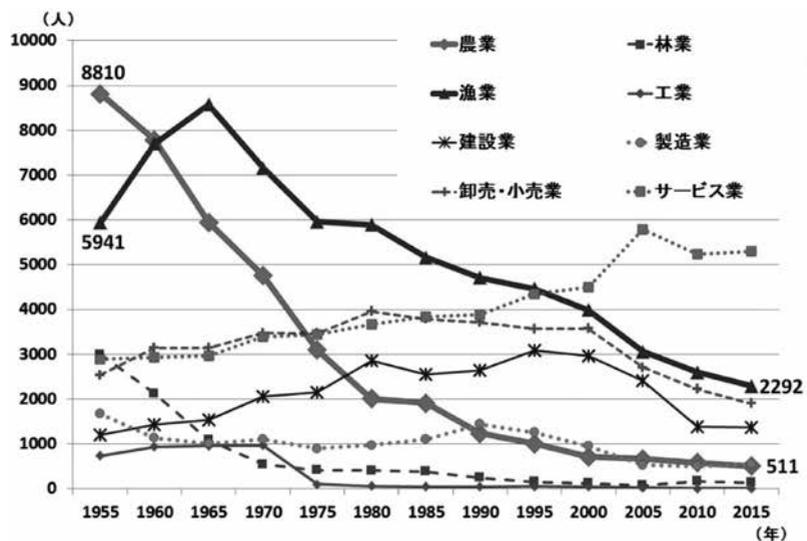
(*) ご進講のテーマは「対馬宗家文書からみた江戸時代の日朝貿易」。内容については、宮内庁ウェブサイト <http://www.kunaicho.go.jp/culture/kosyo/kosho-h30.html> (2018年4月19日閲覧) 参照。
 (**) 平安時代後期、学者・歌人の大江匡房が漢文で著した「対馬国貢銀記」に、対馬から朝廷に献上する銀の採掘製錬・輸送の実情が記述されており、貴重な地誌ならびに鉱業技術資料となっている(『国史大辞典』)。
 (***) 2017年2月6日、琉球大学動物生態学研究室がツシマヤマネコの生態調査のため長崎県対馬市に設置した自動撮影装置にカワウソの動画が撮影され、同年8月17日に日本における38年ぶりの生体確認となす動画を発表した。琉球大学ウェブサイト http://www.u-ryuky.ac.jp/univ_info/announcement/press2017081701/ (2018年4月16日閲覧) 参照。

(図3) 対馬の人口予測



データ出所：対馬市作成

(図4) 対馬市の産業構造



データ出所：対馬市作成

人口減少がゆるやかに来ています。とはいっても、特に高齢化の進行は激しく、現在の高齢化率は約35%ですが、将来の高齢化率は全体で50%を超え、70%以上になる地区も出てきます。

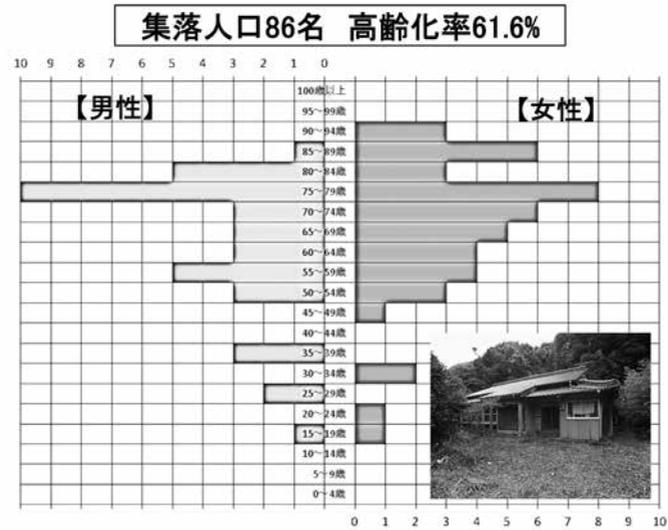
また、産業構造を見ますと、対馬の基幹産業である一次産業の担い手の減少は著しく、産業の停滞を招いているところ。特に農業が極端に減っています(図4)。

これはある集落の現在の人口構造です(26頁図5)。高齢者ばかりで、地域づくりの担い手になる人はごくわずかです。私は平成28年3月に三代目対馬市長に就任いたしました。選挙期間中、くまなく対馬の全集落を回る中で、改めて空き家が多いことに驚きました。この集落にも20軒程度の空き家がありました。あれから2年ほど経ちましたので、ますます空き家が増えていっているのではないかと危惧しています。

いまでも厳しい状況で、この先どうなるかについて考える課題は多いのですが、これは同じ集落の25年後の予想です(26頁図6)。人口減少は教育、交通、医療、福祉といった、人が暮らす上でのサービスの維持を困難にし、いままで人が自然と関わることで維持されてきた里地、里山は荒れ、さらにシカやイノシシが増え、対馬の生物の多様性にまで影響を与えています。

今、シカが増え過ぎたことで、森の中の下草がなくなり、食草にしているツシマウラボシシジミというチョウの希少種が絶滅の危機にさらされています。人口減少はそのような面にまで影響を及ぼしているところ。このような厳しい状況であっても、明るい兆しも見られます。この集落に若き生態学者・川口幹子(もとこ)さんが移り住みました。人口として1%にもならない移住ですが、類は友を呼び、川口さんに影響を受けた若い人たちが次々に移り住んでおり、住める

(図5) 対馬のある集落の現在 (2010年)



データ出所：平成22年度国勢調査小地域集計

(図6) 25年後の同集落の姿 (2035年)



データ出所：対馬市 (推計：九州経済調査協会)

家が足りないほどになっております。

川口さんは平成26年に地元の漁師と結婚され、集落では23年ぶりの披露宴となりました。さらにおめでたいことに、平成28年4月に男の子が生まれました。集落で赤ちゃんの声が響くのは22年ぶりのことです。

3. 自立と循環の宝の島、対馬

明るい兆しもありますが、全体としては、依然厳しい状況です。しかしここで諦めては終わりです。海も山も川も里もあり、資源が豊富で、大陸にも近いこの島の可能性は無限大です。当市のロゴ「つしまヂカラ」は島の形と無限大を掛け合わせております(図7)。

人口構造や少子高齢化に伴うさまざまな課題は、本土の10年先をいくものであり、言い方を変えれば、対馬は課題先進地です。それらの課題にチャレンジすることは対馬

のみならず、他の地域や日本全体、そしてこれから経済成長を終えるであろう発展途上国に対し、さまざまなヒントを示せると思います。私たち対馬は、離島や過疎地域のけん引役、モデルとして、常にポジティブに前を向き、持続可能な社会、つまり自立と循環の宝の島を目指す

(図7) 対馬市のロゴマーク



指して、チャレンジを続けていきます。そのために当市では、ひとつをつくることでなりわいをつくり、人々が安心して暮らせるつながりをつくり、その上で、暮らしの存立基盤であるこの島を後世に継承するために、ふるさとをつくってまいります(図8)。

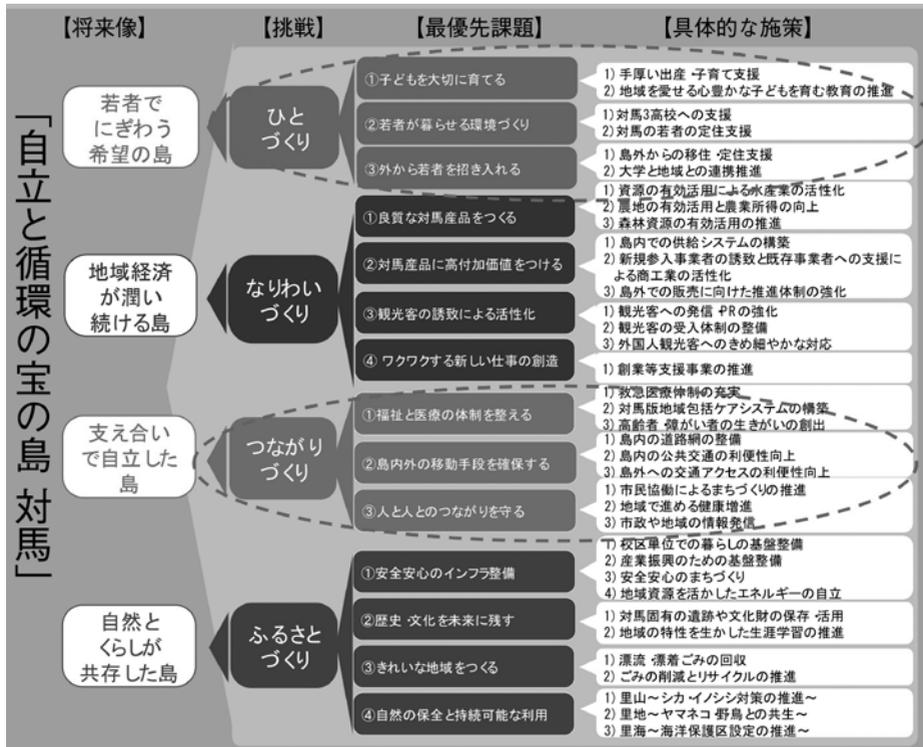
図8にお示しした四つの循環を永続なものとするために重要なことは「ひとつづくり」です。平成23年度から、総務省の地域おこし協力隊制度を活用した「島おこし協働隊」を始めました。特定分野の専門知識や経験を有し、地域づくりや島暮らしに関心を持つ都市の若者を「島おこし協働隊員」として受け入れ、外部からの目線を活用した地域づくりに取り組んでもらっています。これまで21名の隊員を受け入れましたが、対馬に与えた影響は大きく、数々の成果を残しています。この制度は任期3年ですが、平成29年度末卒業予定者も含め、卒業した17名のうち

10名が対馬に残り、引き続き活動を続けております。

この島おこし協働隊員の中で、数々の成果を出し、全国的に注目をされていますのが、先ほどご紹介した生態学者の川口幹子さんです。彼女は、あえて限界集落に移り住み、資源もエネルギーも地域内で循環できるような持続可能な社会の実現に向け、大学で培った専門知識とネットワークを生かし、さまざまなことに挑戦しています。

しかし、その集落は、知恵はあっても体は動かないご高齢の方ばかりです。地域再生のためには、同じ志を持った若い人たちの活力が必要です。そこで、彼女は住居と仕事を同時に作り、人を呼び込むために農地再生や古民家再生などに取り組んでおります。類は志のある友を呼びます。川口さんの熱い思いや行動に刺激を受けた同志が島に移り住み、中間支援組織(中)を立

(図8) 自立と循環の宝の島 対馬



ち上げて、ともに持続可能な社会の実現に向けて活動をしております。

これらの活動には、今後の社会を生き抜く上で、さまざまなヒントや学びがあります。そうした学びをサービスとして提供し、代わりに労力や地域にないものを外から提供してもらおうと始めたのが「域学連携」です。

高齢者対策は全国各自治体の課題ですが、本ご紹介したいのは地域包括ケアシステムの構築です。平成28年6月に、秋田から桑原先生という優秀な医師に来ていただきました。対馬市の医療統括官として、市内の診療所業務の傍ら、在宅医療への移行、実践や幅広い職種の連携によって地域医療が学べるプログラムづくり、地域包括ケアシステムの構築に向けてご活躍いただいています。

耕作放棄地を活用し、高齢者等が集える拠点づくりをJA共済総研や都市部の大学生、地元

住民が一緒となって取組みを始めています。このように、少しずつではありますが、高齢者の自立、活躍の場、集いの場づくりを進めていくことで、新たな動きが出てくるものと期待しているところです。

(*4) 「地域おこし協力隊」については、総務省ウェブサイトを
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_kyousei/c-kyousei/02/kyousei08_03000066.html (2018年4月19日閲覧) 参照。
(*5) 一般社団法人M11 <http://sustainablem11.jp/>

4. 「島は島なりに治めよ」

私は対馬を日本の縮図と捉えています。これからは、ひとつづくり、つながりづくりが地域に住み続けるためのキーワードになってくると考えています。地域包括ケアや域学連携をはじめ、対馬の取組みが日本のモデルとして捉えていただけるよう頑張つてまいりますので、皆さま方のアイデア、ご意見等がありましたらお聞かせ願いたいと思います。

対馬宗家の当主^(*6)の言葉に「島は島なりに治めよ」があります。私は、この教えのように、対馬は対馬なりに頑張つていきたいと考えております。

(*6) 宗家17代当主・宗義調(よしげ)(1532-88) 戦国・安土桃山時代の守護大名。倭寇討伐や朝鮮との通行貿易に尽力した。

